

# 恭仁宮跡ほか最新の発掘調査 及び研究成果に迫る —宮の造営、寺院・河川の整備—

## 1. 恭仁宮の造営

—恭仁宮跡の発掘調査から—

京都府教育庁指導部文化財保護課

藤井 整 P 1 ~ P 8

## 2. 長岡京造営と寺院の整備

—最新の調査研究の成果から—

大山崎町教育委員会

古閑正浩 P 9 ~ P16

## 3. 桂川の整備と治水事業

—山崎津跡及び木津川河床遺跡の発掘調査から—

公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター

小池 寛

中川和哉 P17 ~ P27

日時：平成25年3月2日（土） 午後1時30分～4時30分

場所：大山崎ふるさとセンター ホール

主催：京都府教育委員会

公益財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

後援：大山山崎町教育委員会

# 恭仁宮跡の造営

## － 恭仁宮跡の発掘調査から －

京都府教育庁指導部文化財保護課

副主査 藤井 整

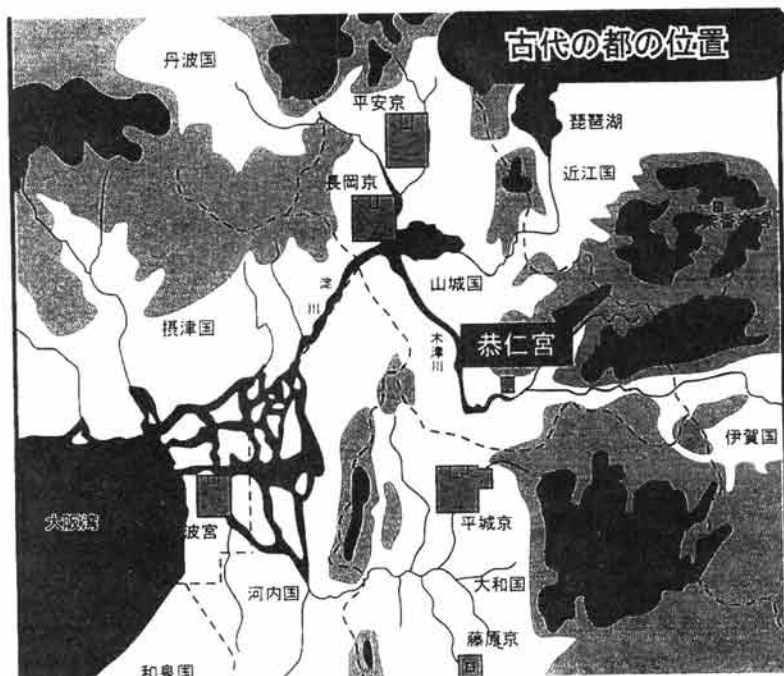
### 1. はじめに

京都府には、古代に3つの都が営まれました。およそ1200年前の延暦13(794)年に京都市に平安京が、その10年前の延暦3(784)年には、向日市・長岡京市・京都市・大山崎町にかけて長岡京が造られました。

恭仁京は、さらにその45年程前の天平12(740)年、奈良時代の中ごろに、聖武天皇によって木津川市に造られた都です(第1図)。

恭仁京の中心、恭仁宮には、天皇が暮らし、様々な儀式などが執り行われた内裏、政務や国家の儀式が行われた大極殿や朝堂院、さらには官人が仕事を行った役所(官衙)など国の中でも最も重要な施設が造られていました。しかし、天平16(744)年には、都は大坂の難波宮へと移り、さらにその後再び奈良の平城京へと戻されることとなりました。恭仁京は国の首都としての役目を終えた後、天平18(746)年には、その中心部が山背国分寺へと造り替えられました。

恭仁宮跡では、昭和48年度から京都府教育委員会が、そして昭和61年度からは、旧加茂町教育委員会(現木津川市教育委員会)と京都府教育委員会が協力して発掘調査を行ってきました。



第1図 古代の都の位置

## 2. 恭仁宮はどんなところ？（第2図）

### ○恭仁宮の範囲（宮大垣）

恭仁宮は、東西約 560m、南北約 750m の範囲を高い土塀（築地塀）で囲まれていました。平城京と比べると3分の1程度のコンパクトな宮でした。宮城への出入り口となる門は、いくつか設けられていたと考えられますが、東南隅付近に造られた東面南門のみが見つかっています。

### ○大極殿院地区

大極殿院は、天皇が儀式を行うための大極殿がある、最も重要な地区でした。大極殿は、東西が約 45m、南北が約 20m もある大きな建物で、現在も恭仁小学校の北に高さ 1 m 以上の大きな土壇が残っています。大極殿は、柱を大きな石材の上に建てる礎石建物で、今も礎石が残されています。

恭仁宮の大極殿と、その周囲に巡らされた回廊については、『続日本紀』天平 15 年 12 月 26 日の条に、「平城の大極殿并に歩廊を壊ちて遷し造る」と記されています。平城宮跡と恭仁宮跡での継続的な発掘調査によって、この記載が史実であったことがわかっています。平城遷都 1300 年祭を契機に復元された平城宮の大極殿は、恭仁宮の大極殿を参考に復元されたものです。

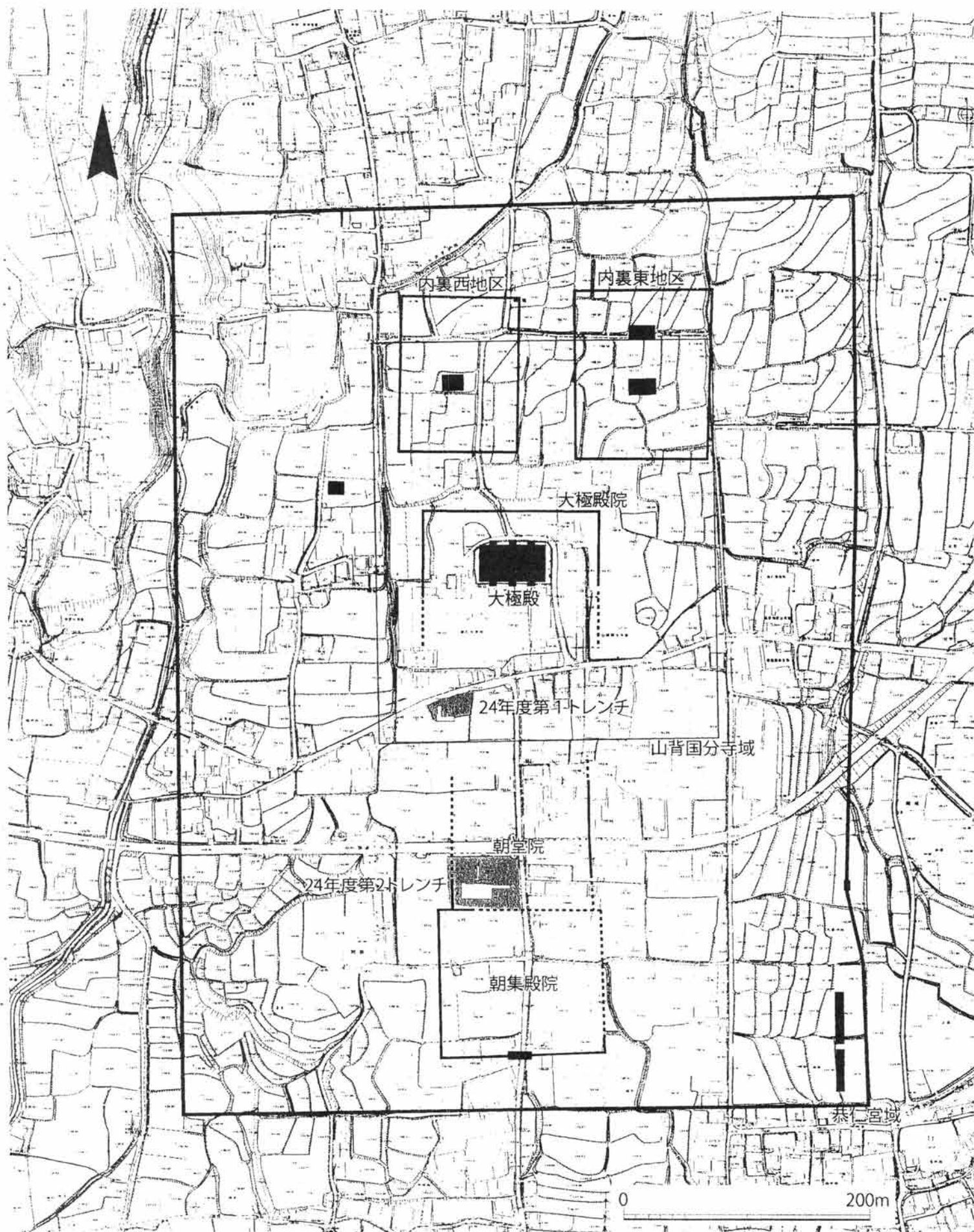
### ○内裏地区

内裏は、天皇が住まいし様々な儀式などが行われた場所です。恭仁宮跡では、大極殿の北側に、東西に2つ並ぶ「内裏西地区」・「内裏東地区」があります。「内裏西地区」は、東西約 98m、南北約 128m の周りを全て板塀（掘立柱塀）で、隣にある「内裏東地区」は東・西・南の三方を土塀（築地塀）で、北側だけは板塀（掘立柱塀）で囲んでいました。「内裏東地区」の広さは東西が約 109m、南北が約 139m で、「内裏西地区」より一回り大きく造られていました。

平城宮などでは、内裏は1つだけで、恭仁宮のように2つに分かれている宮はありませんでした。しかし、最近の調査で、紫香楽宮も同じような構造を持っている可能性があることがわかってきています。

### ○朝堂院・朝集殿院地区

朝堂院は、貴族や役人が儀式などのために出仕するところ、そして朝集殿院は、その前に彼らが集まるところで、周囲は板塀（掘立柱塀）で囲まれていました。区画の南側では、出入り口となる朝集殿院南門も見つかっています。平成 24 年度からは、朝堂院の区画内部に建てられていた建物跡の調査がはじまりました。



第2図 恭仁宮跡全体図及び今年度のトレンチ位置図（1/4,000）



### 3. 平成 24 年度調査の成果（第 3 図）

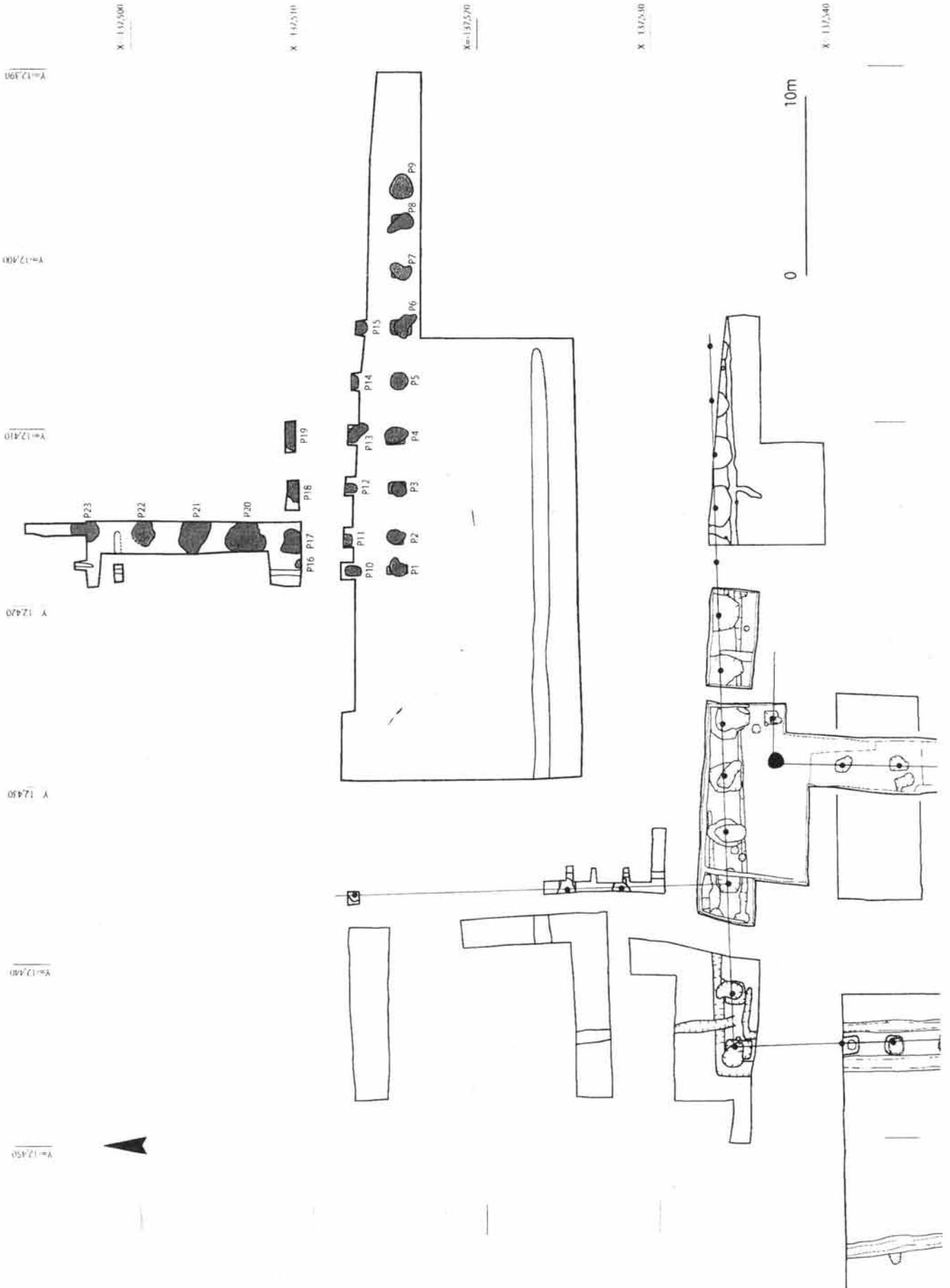
平成 21 年度までの調査によって、朝堂院の南辺と東西辺区画の位置が確定しています。平城宮跡の朝堂院では 12 棟の建物（朝堂）が、難波宮跡では 8 棟の建物が整然と配置されていることがわかっています。今年度の調査は、朝堂院の区画の内部にどのような建物が建てられているのかを確認することを目的として実施しました。

その結果、東西方向に 8 間分、南北に 6 間分の柱穴が並んでいるのが見つかりました。柱穴は、東西 90cm 前後、南北 100cm 前後の長方形に掘られていました。その柱穴と重なって、柱を抜き取った際の不整形な楕円形の穴も見つかり、この建物は最終的に撤去されているということもわかりました。抜き取り穴からは、平瓦や丸瓦が出土したことから、少なくとも建物の一部には瓦が用いられていたこともわかりました。

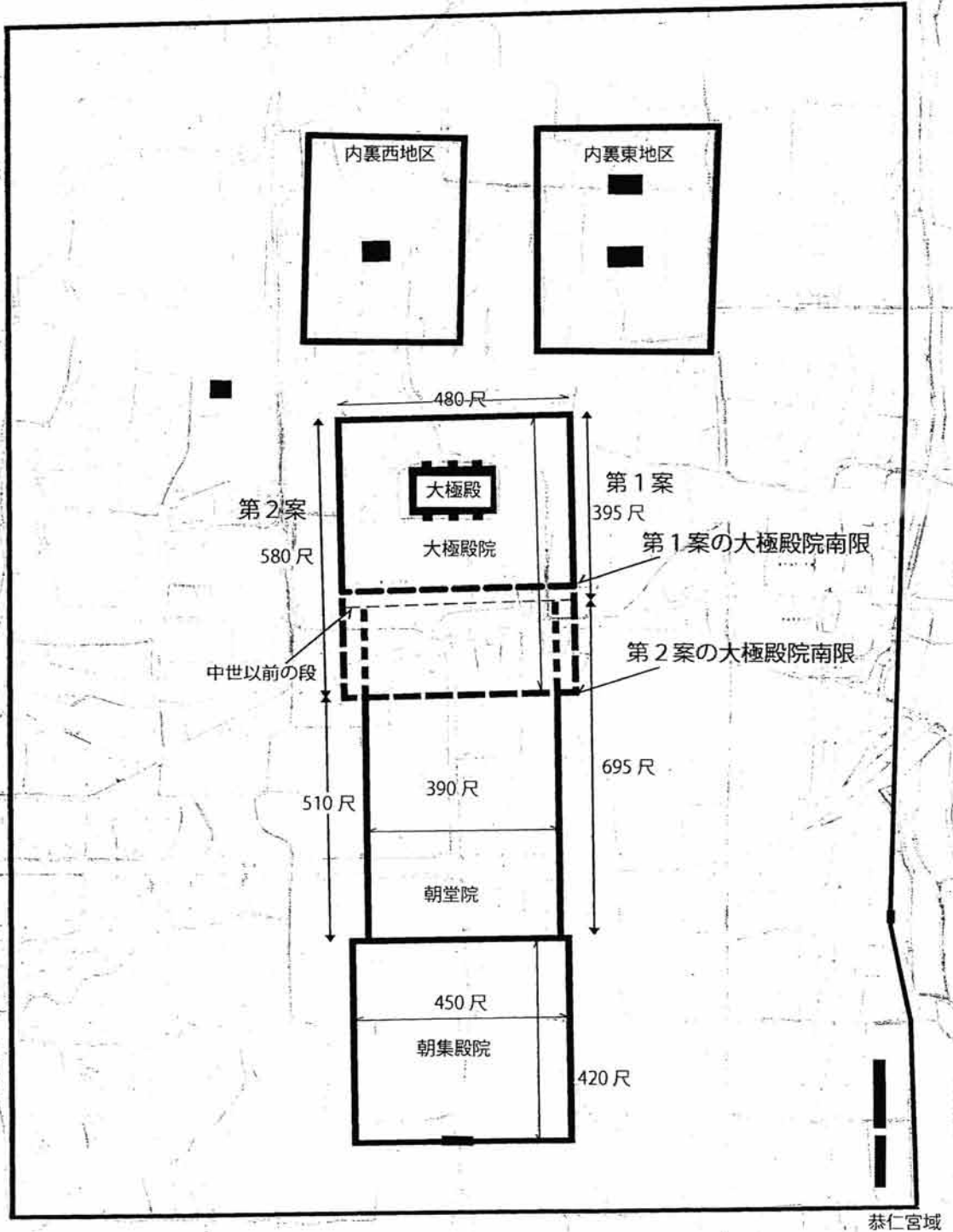
柱穴は、東西両端の 1 間分だけがそれぞれ 5 尺（約 1.5m）の間隔、その他は 10 尺（約 3m）の間隔で配置されており、東西 70 尺（約 21m）南北 60 尺（約 18m）の、東西 8 間、南北 6 間の掘立柱建物となる可能性があることがわかりました。

この建物に伴うと考えられる柱穴は、全部で 23 基見つかりました。南西隅の柱（第 3 図 P 1）は、朝堂院の西辺区画からも南辺区画からもそれぞれ 60 尺（約 18m）の位置にあります。また、建物の東端は西辺区画から 130 尺（約 39m）の位置にあたり、朝堂院東西幅 390 尺（約 116m）の 1/3 の場所に計画的に配置された建物であるということが明らかになりました。今回の発見は、朝堂院の構造解明にむけた極めて重要な成果となりました。

ところが、課題も残りました。それは、建物の規模や構造など詳細がわからないということです。今回見つかった建物は、最大で東西 8 間、南北 6 間の掘立柱建物となる可能性があります。しかし、これまでに平城宮跡などで見つかった朝堂の建物は、いずれも建物の妻側（建物の短辺側）が 4 間と、細長い建物になっているのが特徴で、今回のものはそれよりも広く、最大で 6 間の正方形に近い形の建物となってしまう可能性がある点が異なります。このことから、見つかった 23 基の遺構の中に、違う時代の遺構が混じっていないか、建物を構成している柱は全部で何本あったのか、今後の調査で確定するための作業が必要だということがわかりました。



第3図 朝堂院地区トレンチ平面図 (1/300)



第4図 恭仁宮跡復原想定図 (1/400)

#### 4. まとめ

##### ○今年度の調査成果

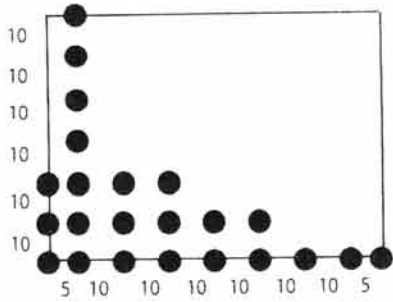
- ・ 恭仁宮跡ではじめて朝堂の建物跡を検出しました。
- ・ 朝堂院の中で、最も南西に建てられていた朝堂です。

##### ○見つかった建物の特徴

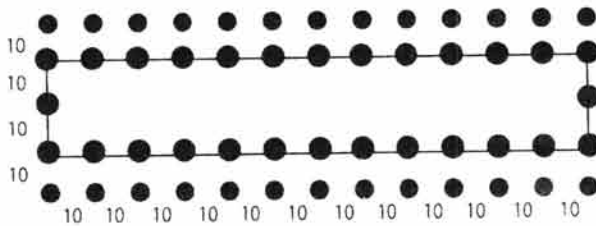
- ・ 今回の調査では、全体がどのような構造だったのかはわかりませんでした。
- ・ 建物は、最大で東西8間（約21m）、南北6間（約18m）の掘立柱建物になると考えられます。
- ・ 建物の東西両端だけが、柱間の間隔が5尺と短い構造です。類例の見つかっていない、変わった形態の建物であることがわかりました。
- ・ 見つかった柱穴は、複数棟の建物となる可能性も残っていますが、1棟の建物である場合は、正方形に近い平面形となり、他の都で見つかっている朝堂とは違う形になることがわかりました（第5・6図）。

##### ○今後の課題

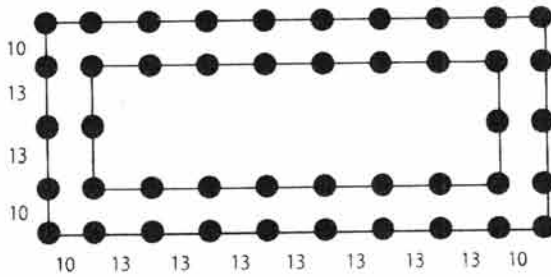
- ・ 見つかった23基の柱穴の中に、違う時代の柱穴が混じっていないか、建物を構成している柱は全部で何本あったのかを明らかにする必要があります。
- ・ 建物の大きさを確定したら、朝堂院の中に何棟の建物が建てられていたのかを明らかにする必要があります。



1. 恭仁宮跡  
8間桁行70尺×梁行6間60尺(最大)

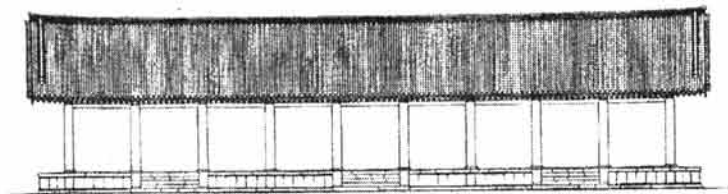


2. 平城宮跡東区(下層)  
西第6堂  
桁行12間120尺×梁行4間40尺

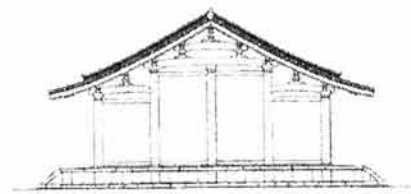


3. 平城宮跡東区(上層)  
西第6堂  
桁行9間111尺×梁行4間46尺

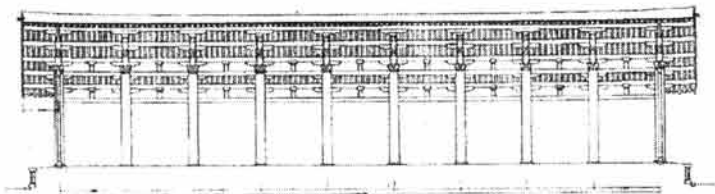
第5図 恭仁宮の朝堂と平城宮の朝堂比較



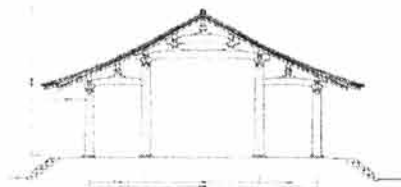
第一六四図 朝集殿復原正立面図



第一六五図 朝集殿復原正立面図



第一六六図 朝集殿復原桁行断面図



第一六七図 朝集殿復原桁行断面図

第6図 朝集殿の復原想定図



# 長岡京造宮と寺院の整備

## － 最新の調査研究の成果から －

大山崎町教育委員会 生涯学習課

課長補佐 古閑正浩

### 1. はじめに

ここでは、寺院から出土する長岡宮式軒瓦ながおきゅうしきのきがわらの分析を通じて、長岡京の造宮過程の中で寺院の整備がどのように位置付けられたのかを検討してみることになります。

筆者は、長岡京の造瓦組織ぞうがそしきの構成とその展開について検討し、さらに供給地との関係から、長岡京の造宮過程について論じたことがあります（古閑 2011）。この際、長岡京の造瓦組織しよじと諸寺との関係についてもふれました。ここでは、諸寺から出土する長岡宮式軒瓦の需給関係を長岡京の造瓦体制とその展開の中で改めて具体的に位置付けます。その上で諸寺の位置関係や分布圏を考え合わせることによって、冒頭の目的を果たしてみます。

### 2. 長岡京の造瓦組織とその展開

ここでは、検討の前提として、長岡京の造瓦組織とその展開について再論します。

長岡京の造瓦体制は、三者の造瓦組織によって構成されます。各造瓦組織の成立は、造宮使系ぞうぐうしけい→勅旨所系てしどころけい→内廷官司系ないていかんじけいの順を経ます。造宮使系では、大極殿院だいごくでんいん・朝堂院ちょうどういんの造宮に際して、当初は、軒平瓦 6732Q だけが生産されており、朝堂院南面区画の造宮以降に生産される型式が増加します。勅旨所系の成立の上限は第二次内裏だいにり（東宮とうぐう/ひがしみや）所用瓦しよようがわらの生産と併行する時期に、内廷官司系の成立は延暦十（791）年以前にそれぞれ比定されます。

この他、乙訓寺おとくにでら付属造瓦所ぞうがしよ（乙訓寺系）は、勅旨所系・内廷官司系と同範どうはん関係を有し、その成立は、前者より後出し、後者に先行します。

造宮使系・勅旨所系・内廷官司系のその後については展開があります。造宮使系は、平安京の造宮使造瓦所にしがもがように想定される瓦範がはんの一部が移動します。勅旨所系は、北野廢寺きたのはいじと山背国分寺やましろこくぶんじへ瓦範の一部が移動します。内廷官司系は当初の生産後、諸寺への供給を担うように変容します。ここでは、これを、諸寺系しよじけいと称しておきます。勅旨所系と

内廷官司系のそれぞれ後の展開については、いずれも寺院の整備に関わる動向である点の特筆されます（古閑 2011）。

### 3. 長岡京造営と諸寺の整備

ここでは、長岡宮式軒瓦の諸寺への供給時期や供給先との関係について検討します。長岡宮式軒瓦が供給された寺院は、11 か寺を数えます。各寺院における軒瓦群を造瓦組織ごとに区分し、その傾向を抽出してみます。造宮使系と勅旨所系は、京内の乙訓寺や川原寺、宝菩提院廢寺や鞆岡廢寺といった宮京隣接寺院に集中的に供給される傾向がうかがえます。諸寺系は、宝菩提院廢寺と葛野郡・愛宕郡の諸寺へ供給される傾向を示します。北野廢寺と山背国分寺へは、勅旨所系の一部の瓦範が移動します。

勅旨所系と内廷官司系にそれぞれ後出する造瓦組織は、宝菩提院廢寺を除いて国分寺や葛野郡・愛宕郡など、山背国部内諸寺の整備に関わる点を特徴とします。このうち、檜原廢寺・北白川廢寺・山背国分寺では、塔に供給されています。こうした傾向を考え合わせると、勅旨所系と内廷官司系に後出する造瓦組織の動向は、延暦十年の山背国部内諸寺の「浮圖修理詔」に契機が求められます。

供給先の傾向の差異や造瓦組織の展開過程を重視すると、造宮使系・勅旨所系と他の造瓦組織の諸寺への供給は、時期差を示す可能性が高いと考えられます。京内及び宮京隣接寺院の4か寺については、いずれも造宮使系と勅旨所系から供給を受けている点の特筆されます。この4か寺の整備が特に重視されたとみられます。

長岡京外への諸寺に対しては、先述のように、延暦十年以降に比定した勅旨所系と内廷官司系のそれぞれ後の造瓦組織が対応しており、京内及び宮京隣接寺院のあり方とは時期や供給先の傾向が異なります。

以上、述べてきたことを端的に示せば、中央からみた諸寺の重要度や整備の優先度が、宮京との遠近によって決せられていたことが察せられます。

### 4. 長岡京における諸寺圏形成

ここでは、長岡宮式軒瓦が供給された寺院の位置関係や分布のあり方を検討します。長岡宮式軒瓦の諸寺における分布は、京内及び宮京隣接寺院、葛野郡、愛宕群、綴喜郡、相楽郡に広がります。上述のように、京内では乙訓寺と川原寺、宮京隣接寺院では宝菩提院廢寺と鞆岡廢寺が上げられます。このうち、川原寺を除く3か寺は、7世紀以来の既存寺院です。

京内及び宮京隣接寺院の位置関係については、以下のようにまとめられます。

南北は、鞆岡廢寺と宝菩提院廢寺が位置し、東西は川原寺と乙訓寺が位置します。このうち、北・西・南の3か寺は既存寺院であり、これらは長岡京の条坊施工範囲の境界付近に位置しています。また、川原寺の新造寺院としての評価が首肯されるなら、その選地に際しては、東の境界地にこれを占地させることによって、既存寺院を有効に利用しながら、宮京を実質的に取り囲むような配置を意図的に行ったことが察せられます。

京外諸寺では、勅旨所系と内廷官司系のそれぞれ後の展開が葛野郡と愛宕郡に偏っている点が注意されます。これは、山背国内の諸寺というだけでなく、平安京との関係を示唆しているようにも思われます。特に北野廢寺、広隆寺、北白川廢寺は、新京遷都後も平安京造営の所用瓦によって整備が続けられています。

延暦十年を契機とする京外諸寺の整備は、結果的に平安京の近京諸寺の整備として多くが継承されており、長岡京廢都、平安京遷都の過程を考える上でも注意を要します。

## 5. まとめ

寺院出土の長岡宮式軒瓦に注目し、長岡京の造営過程との併行関係を中心に分析してみました。京内および宮京隣接寺院である乙訓寺・川原寺・宝菩提院廢寺・鞆岡廢寺は、造宮使系や勅旨所系の造瓦所から瓦の供給を受け、宮城や京内諸院の造営に併行して整備がなされています。宝菩提院廢寺・檜原廢寺・北野廢寺・広隆寺・北白川廢寺・山背国分寺では、諸寺系造瓦所の供給や勅旨所系造瓦所の瓦範が各造瓦所に分与されて整備がなされます。これらは、延暦十年「浮圖修理詔」に関係する動向とみられます。これを年代の指標にすると、延暦十年以前では、近い寺院の整備に、それ以降では、遠い寺院の整備にそれぞれ着手している傾向がうかがえました。京内および宮京隣接寺院では、複数の造瓦所から供給を受けていることを考え合わせると、中央からみた諸寺の重要度が、宮・京との遠近によって決せられていたことが察せられます。

京内および宮京隣接寺院では、既存の寺院を主として宮・京を囲むように寺院圏が形成されています。こうしたあり方は、平安京とも異なる独自相であり、今後、長岡京条坊との関係を含めて検討すべき課題です。

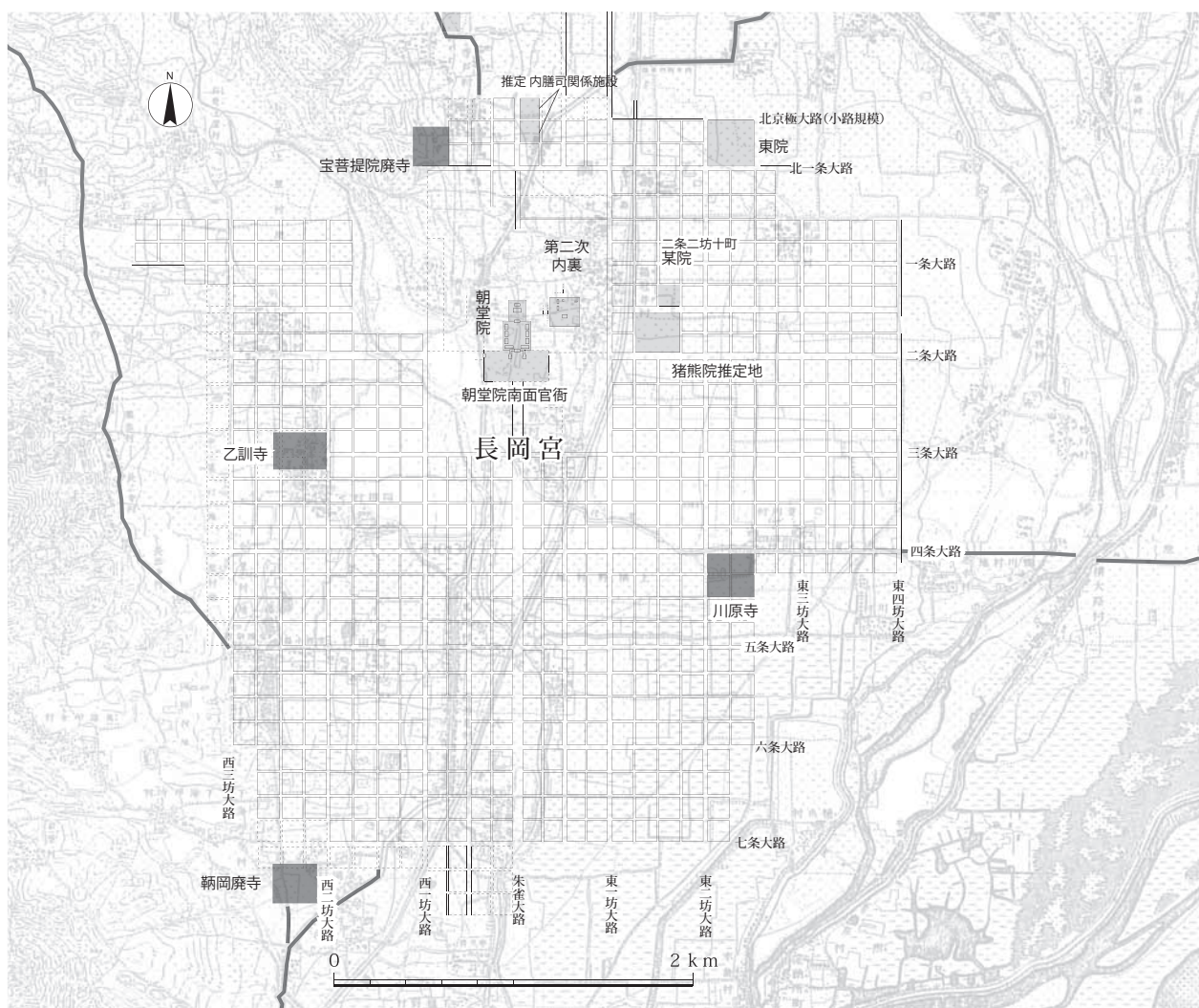
ところで、延暦九（790）年九月には、皇太子安殿親王の病氣平癒のため、「京下七寺」において誦經を行わせています。「京下」は、長岡京でも条坊内に限定する必要はないと考えられます。史料による七寺の例を検討した土橋誠氏によれば、その時々に応じて寺が決められたようです（土橋 1996）。延暦九年の七寺がどの寺院跡に当たるのか、興味は尽きませんが、「京下」という空間が特定のでないため、七寺比定の成案は得難いと思われまます。考古学的には、むしろ、長岡京造営事業と寺院整備の交差の実態を捉えることが重



要です。「京下七寺」における<sup>ほうえ</sup>法会実施の前提がここに存在するからです。

#### 参考文献

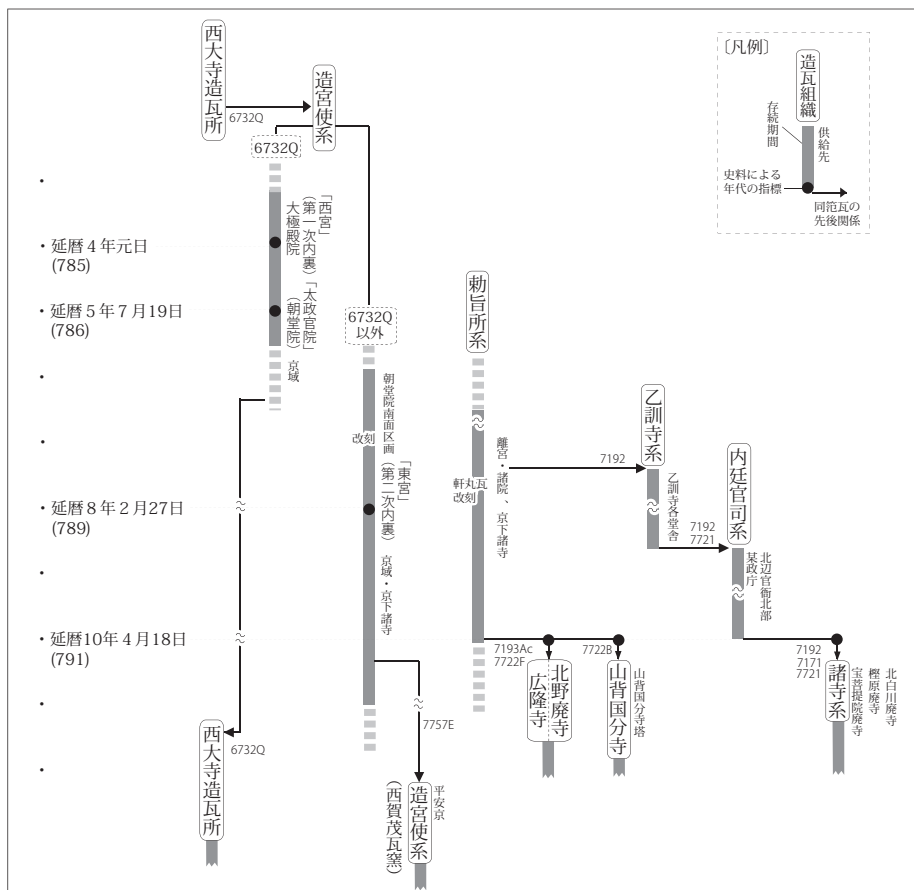
- 足利健亮 1985 「横大路考」(『日本古代地理研究』大明堂)
- 網伸也 2007 「古代都城における二つの形態-都城形態からみた長岡京-」(『国立歴史民俗博物館研究報告』134号) 後に『平安京造営と古代律令国家』塙書房 2011 に採録。
- 梅本康広 2005 「長岡宮式軒丸瓦 7171 型式について」(『向日市埋蔵文化財調査報告書』第 66 集、財団法人向日市埋蔵文化財センター)
- 國下多美樹 2007 「長岡京-伝統と変革の都城」(『都城 古代日本のシンボリズム』青木書店)
- 古閑正浩 2004 「廃都後の長岡京地の再編と瓦-中福知遺跡の再評価をめぐって-」(『古代文化』第 56 巻第 8 号)
- 古閑正浩 2010 「河内百済寺の造瓦組織と王権」(『ヒストリア』221)
- 古閑正浩 2011 「長岡京の造瓦組織と造営過程」(『考古学雑誌』第 95 巻第 2 号)
- 佐藤泰弘 2000 「桓武朝の復古と革新」(『年報 都城 12』財団法人向日市埋蔵文化財センター)
- 土橋誠 1996 「六国史に見える七寺-七大寺・京下七寺・都下七寺・七箇寺をめぐって-」(『京都府埋蔵文化財論集』第 3 集)
- 中島信親 2004 「離宮系」長岡宮式軒瓦の変遷について」(『考古論集(川越哲志先生退官記念論文集)』)
- 菱田哲郎 2005 「宝菩提院廃寺と長岡寺」(『向日市埋蔵文化財調査報告書』第 64 集第 2 分冊)
- 堀裕 2010 「平安京と寺々-平安初期の構造と歴史-」(『恒久の都 平安京』古代の都 3、吉川弘文館)
- 山中 章 1989 「長岡宮式軒瓦と寺院の修理-延暦十年の山背国の浮圖の修理をめぐって-」(広田長三郎編『古瓦図考』)



第 1 図 長岡京条坊の施工推定範囲と仮製図







第3図 長岡京の造瓦組織による瓦の供給と造営過程

表1 長岡京内および山背国諸寺における長岡宮式軒瓦の出土

所在	造瓦組織 寺名	造宮使系造瓦所		勅旨所系造瓦所		乙訓寺造瓦所		延暦10年以降		調査回数	文献		
		造宮使系造瓦所		勅旨所系造瓦所		乙訓寺造瓦所		諸寺系造瓦所				各付属造瓦所	
		軒丸	軒平	軒丸	軒平	軒丸	軒平	軒丸	軒平			軒丸	軒平
右京	乙訓寺	7133C 7133Eb	7785 7757A		7722A 7722G	7192	7721			R1 R26 R362	R7 R171 R692	古瓦聚成 木村図録 府1967 府1980 府セ15冊 長年報H2 長年報H12	
左京	川原寺		7757Ac		7722							京市誌H4度	
右京・宮北辺	宝菩提院廃寺	7133 7133Eb 7149C	7757	7193か 7194か				7192 7171	7721	7812 7755 R885	R632 R883	古瓦聚成 木村図録 向5集 向64集 向76集	
右京南辺	鞆岡廃寺	7133	7785 7757Ac 7757B 7757D	7193Ab	7722A 7722E 7722G					R129		古瓦聚成	
葛野郡	檜原廃寺	7133D						7171	7721				木村図録 京市誌H9度
	北野廃寺		7757 7757Ac 再利用瓦か					7194Ab 再利用瓦か	7721 再利用瓦か	7193Ac	7722F		木村図録 京研報7冊 木1987
	広隆寺										7722F		平瓦図録
愛宕郡	北白川廃寺							7171					京市誌H7度
綴喜郡	井手寺					7192	7721						木村図録
相楽郡	山背国分寺										7722B		恭仁1984
	高麗寺						7721						山城7集



1 乙訓寺出土



3 櫻原廃寺出土



2 乙訓寺出土



4 櫻原廃寺出土 (1967年調査)



第4図 長岡京と周辺寺院の分布

図版 乙訓寺と櫻原廃寺の7721型式

メ 毛

# 桂川の整備と治水事業

やまざきのつあと きづがわかしょういせき  
 - 山崎津跡及び木津川河床遺跡の発掘調査から -

公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センター

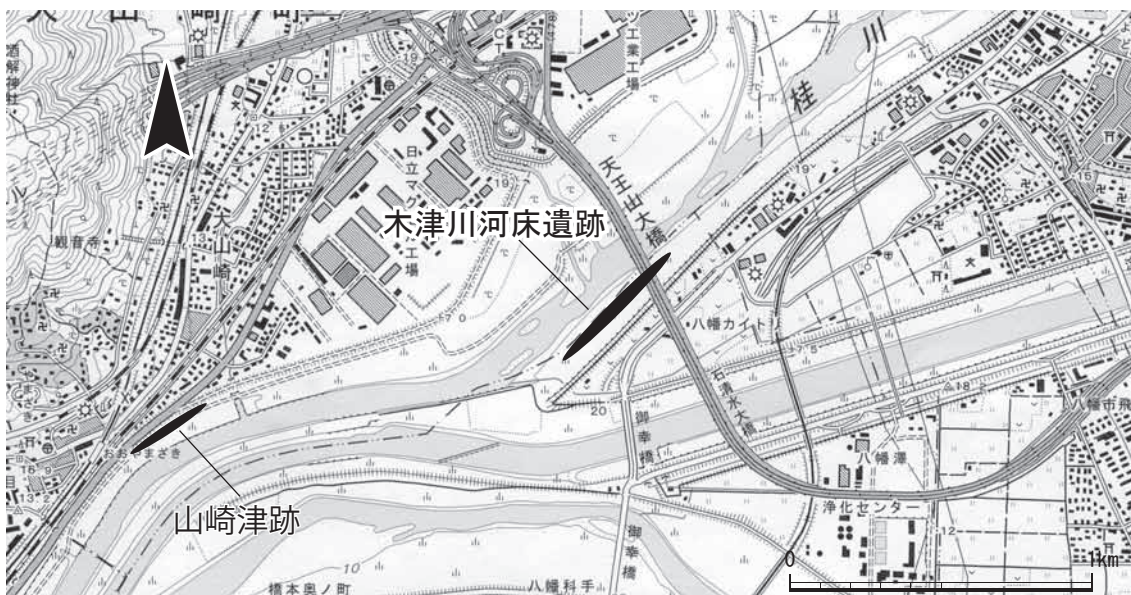
課長補佐 小池 寛

主任調査員 中川和哉

## 1. はじめに

今回お話しする大山崎町山崎津跡と八幡市木津川河床遺跡は、現在の桂川に面した河川敷内の遺跡です。

この地域は木津川、宇治川、桂川の3つの川が合流する部分で、天王山と男山丘陵が作った狭隘部きょうあいぶにあたります。そのため古代から現在まで水陸交通の要衝となってきました。山崎津跡では古代から近代、木津川河床遺跡では近代の遺構や遺物が発見できました。



第1図 調査地位置図（国土地理院 京都西南部 1 / 25,000）



## 2. 調査でわかったこと

### (1) 山崎津跡の発掘調査

今回の発掘調査は、桂川緊急河川敷道路の敷設に伴って実施しました。調査地は、天王山山麓から桂川に最も張り出した丘陵裾部に位置しており、桂川と大山崎市街地が最も近接する地点にあたります。

一方、この丘陵先端部には、奈良時代に僧侶行基が布教の拠点とした山崎院や行基が架設したとされる山崎橋をはじめ、平安時代の駅家である山崎駅などの重要な諸施設が位置しています。

今回の調査地は、これらの遺跡群に近接していましたが、河川敷に位置していることから関連する遺構や遺物が既に流出している可能性もありました。しかし、柱穴や溝などのように明らかな遺構を確認することはできませんでしたが、堆積した層の中から奈良時代、平安時代、そして、中世の土器や瓦のほか下駄などの木製品や獣骨、人骨などの遺物が多量に出土しました。

トレンチの断面観察から調査地周辺は、激しい流水にさらされる区域ではなく、川の水際近くで滞水するような比較的安定した環境であったことがうかがえます。おそらく、一帯は、人為的に水流の調整が行われた区域とみることができます。

一方、出土した土器の中にはほとんど割れていない瓦器の椀なども含まれていることから、周辺に港（津）に関わる施設が存在し、港湾周辺の施設や居住区から廃棄された土器群ではないかと考えられます。なお、調査地の周辺は、古代から中世における山崎津の一角を占める地点であったと推定されています。また、出土した「由居」という陰刻文字瓦は、人名である可能性が指摘できます。このような陰刻文字瓦は、大山崎町内では比較的たくさん出土しています。行基が建立したとされる山崎院に使用されたと考えられており、山崎津跡でははじめての出土例となりました。このことから山崎津跡に関係する何らかの施設が、現桂川の水際に近接する地点まで広がっていたことを確認できました。

そのほか、発掘調査では、江戸時代後期から近代初頭まで流れていたと考えられる幅約7～8mの大規模な流路を確認しました。この流路は、杭などの護岸により人為的に管理されていたことがわかっています。明治時代の仮製図にみえる永荒沼から桂川に注いでいた河川の一つと考えられます。近世の山崎津周辺には、こうした川船の通行を可能にした大規模な流路が複数存在し、港湾機能を果たしていたとみられます。また、1596年の慶長・伏見大地震に伴うと考えられる噴砂などの地震痕跡も確認することもできました。

今後は、これらの調査成果を周辺に位置する遺跡との関係で、さらに検討を加えていかねばなりません。



## (2) 木津川河床遺跡の発掘調査

木津川河床遺跡は、弥生時代から近世までの遺跡です。遺物が現在の木津川の河原で多く散布していることがわかり遺跡が発見されました。今回の発掘調査では、度重なる河川改修で壊されず、人の記憶から消えていた近代化遺産<sup>きんだいかいさん</sup>と位置図けられる遺構が発見できました。調査地付近では宇治川、木津川、桂川の三川の合流部がありますが、木津川は明治元年に、宇治川は明治29年から始まった工事で現在の位置に付け替えられました。それ以前の調査地は当時の淀川に面していたことになります。

### ①川の付け替えとオランダ人技師の活躍

平成23年度の小規模な調査で加工された石が貼られた遺構を検出しました。当初は江戸時代後半の遺物が多く発見できたことから江戸時代の遺構と考えていましたが、平成24年度調査で検出した構造や規格性から考え、作られた時期を考え直す必要が生じました。淀川土木工事関係の資料を多く所蔵している淀川資料館において、明治時代の河川改修関連の絵図<sup>えず</sup>の閲覧等の資料調査をおこないました。その結果、明治時代の「新宇治川桂川木津川合流口平面図」には、発掘調査地点付近に川に向かって突き出した突起物<sup>とつきぶつ</sup>が描かれていました（第8図）。この図面は沖野忠雄指導のもと、明治29年から実施された宇治川付け替え工事に伴う三川合流部<sup>さんせんごうりゅうぶ</sup>を改変する計画が朱書きで書かれていました。また、図面には山崎村・八幡町の地名が書かれていることから、町村制が施工された明治22年から明治29年に作られた図面であることもわかりました。この図面から私たちが検出したものは明治29年以前にすでに出来上がっており、明治元年から工事が始まり明治3年に工事が終わり付け替えられた木津川にも水制<sup>すいせい</sup>が設置されていることがわかります。この時期に行われた工事には、明治8年から始ったオランダ人技師達によっておこなわれた淀川の改修工事があります。

江戸時代末期の文久年間（1861～1863）に出版された『淀川兩岸一覽』には今回の調査地内にあった狐渡<sup>きつねわた</sup>しの絵「狐渡口」が描かれており、そこには日本の在来工法<sup>ざいらいこうほう</sup>である木杭<sup>きぐい</sup>を多く打ち込んだ杭打ち水制<sup>くいうすいせい</sup>と考えられる絵が描かれています。また、明治元年の木津川付け替え工事の計画書である「山城国木津川立替之節八幡郷辺之図」では水制の記述は認められません。こうした証拠から明治8年から始まるの淀川改修工事に伴う水制と護岸であると判明しました。

### ②なぜ淀川を改修したのか

江戸時代の大阪は「天下の台所」と言われたように日本経済の中心地でした。外国から要求されていた外国船に対する大阪港の開港が明治元年に行われました。当時大阪湾には

淀川が分流して流れ込んでおり、その1つである1684年（貞享元年）に河村瑞賢が開削した安治川の河口から上流に入った部分に当時の大阪港がありました。港の近くには川口外国人居留地も作られました。大阪港は上流からの土砂の流入のため、その水深が浅くなり大型の外国船が直接入れなくなり、小型船に荷を移し替えなくては接岸できない事態におちいりました。そのため外国の大型船の寄港が減り、神戸に寄港するようになりました。こうした寄港船舶の減少は、経済の中心地であった大阪に大打撃を与えました。

港の水深を深くすることが急務でしたが、土砂の流入のため河川の根本的な改修を行わなければ、浚渫してもすぐに水深が浅くなることから、治水技術に長けたオランダ人技師ファン・ドールン達を明治5年に招聘しました。明治6年には、後に日本の治水事業に寄与したエッシャーとデ・レイケが呼び寄せられ、ファン・ドールンに代り大阪港改修の調査を行いました。彼らは流入する土砂は上流部に供給源があると考え、淀川上流部の調査を行いました。その結果、山が森林伐採のため荒廃し土砂が流れだしていることを確認しました。山の植生の復活はもちろんのこと、砂防の必要性を説き、木津川の支流不動川に数種類の砂防施設を実験的に構築しました。

当時の淀川は中洲が発達し、河川が分流したため川底が浅くなっていました。エッシャーはこれら分流した支流を集め、流路を整えることによって一定の深さと幅を持った水路、低水路（幅120m、深さ1.5m）を作り、大型の蒸気船が渇水期でも航行できるよう考えました。明治7年にエッシャーが大阪を離れ工事はデ・レイケに任せられました。当時の京都の外港である伏見から大阪天満橋までの約40kmを上り6時間、下り3時間で結び、江戸時代の三十石舟に比べ1/2の時間で行き来することが出来るようになりました。こうした流路を整える目的で作られたのが今回の調査で検出した貼石状の遺構である水制です。現在はワンドと呼ばれる池状の地形として城北ワンド群で見ることができますが、昭和40年の台風24号による大洪水を受けて建設省には120mであった流路幅を200mに広げ流量を増やす工事を進め、多くの水制はなくなっていったとされています。

### ③文献に現れる水制の構造

水制は水の流れを制御することを目的に設置される構造物で、西欧の技術が入るまでは木製の杭を打って水を制御する透過水制が多く造られており、工事においても近代的な土木計算に裏打ちされていませんでした。

オランダ人技師が用いた技術については、オランダ人たちが書き残した文章（『淀川オランダ技師文書』）や、明治14年に高津儀一によってまとめられた『土木工要録』で知ることができます。

水制は「T」字状になっているものが特徴的で、川に沿って横に張り出す部分を

頭部水制又は平行工、縦工と呼び岸とつながる部分を幹部水制または横工と呼びます。

陸上で木の枝などの粗朶（柴）を束ねて格子状に組み合わせて下格子を作り、その上に粗朶を置き、また格子状の上格子を載せ結束してマット上のものを作ります。それを水面に浮かばせて目的の場所まで運び、杭で固定し、石を上から載せて水没させることによって水制の基礎を作りました。これを粗朶沈床工といいます。水流の速さや水深に応じて工法が細かく指定されていました。水制の最上部の石を用いた仕上げ工法を上覆工とよび、頭部水制に施された石を置くだけの上置工、幹部水制に施された横断面中央部が盛り上がるように貼り石を施さすことを上層工と名付けています。

#### ④発掘に見る水制の構造

発掘調査では水制とそれを繋ぐ護岸が発見できました。水制 S X 6 では先端部側で格子状の空白部の間に礫がまとまっている状況が認められます。これらは粗朶沈床の痕跡と考えられます。また中央部の構造が異なるのは第 15 図にみられる幹部水制と頭部水制の取り付け部と考えられます。E 区の水制 S X 12 では、築造方法を確認する目的でトレンチを縦横に設けました。幹部水制と頭部水制ともに粘質土、砂礫が交互につまれ積まれていることがわかりました。オランダ人たちが残した文章の中に、水制に使用する材料として粘土、砂、石が挙げられています。

また、幹部水制部分には 2 条の並行する石敷きがあり、その間が盛り上がるように貼り石が施されています。同じ構造は幹部水制が検出できた水制 S X 10・16 でも見ることができます。こうした上覆工は第 15 図の幹部水制部分でも描かれています。水制 S X 10・12 では幹部水制部分で見られる 2 条の貼り石の下に円礫製の 2 条の帯状の貼り石が存在しています。断面でかく乱が認められないことや、横断面で盛土が整合的に積まれていることから、幹部水制を造る 1 つの工程を示しているものと考えられます。

水制 S X 14 では水制の中ほどまで明治以前の地層を削りだして作られており、先端部にのみが工事によって形成されています。幅が広く「T」字状の張り出しがないことから他の水制とは構造が異なっています。この水制と水制 S X 12 には先端部に花崗岩角礫も用いられています。この中には石を切り出すときに付いた矢跡が残されたものがあります。オランダ人技師ファンドールの書簡には、水制に利用する粘土や砂は川の近くでたやすく手に入るが、石を他の場所から運ぶと多くの資金が要るので、川面に面した淀城の石垣が多量にあるのでそれを用いたいということが書かれています。それを裏付けるように発掘調査によって現在残っている城の中心部以外の石垣の多くは、石垣が基底石を残して持ち去られていることがわかっています。現在残されている淀城の石垣を見ると、隅の部分には花崗岩が、他の部分には頁岩が用いられています。こうした岩石は水制に用いられている石材と同じでものす。また、水制 S X 12 の盛土に混じって瓦が出土しています。

瓦は棟を飾った小菊瓦や輪違えのが含まれており、立派な建物の屋根瓦が運ばれていることがわかりました。

護岸については護岸 S X 11 に見られるように盛り土が施されている部分がある一方、水制 S X 14 では護岸より張り出して明治以前の層が存在していることから、工事前の川岸が不整形であったと考えられます。表面を覆う礫は水が直接当たる機会の多い下部には大型の礫を落とし込み、それを一部被せるように小型の破碎礫が積まれ、この層は岸の上部平坦面まで覆っていました。また、水制と水制の間で見られた中央にくぼむ静水域（ワンド）にたまった細粒の堆積物の間に薄い粒度の粗い層を挟む堆積は、第 15 図のように頭部水制間が埋まっていき、やがて池状の地形が埋没したことを示しています。こうした堆積物を洪水層が挟んでおり、大正から昭和初期と考えられる遺物が出土していることから、昭和初期までには水制の形が見えなくなっていたものと考えられます。

水制と水制の間は入り江状になっており、S X 11 では木造船に用いられていたと考えられる舟釘がたくさん出土したことから、船が係留されていたと考えられます。

### 3. まとめ

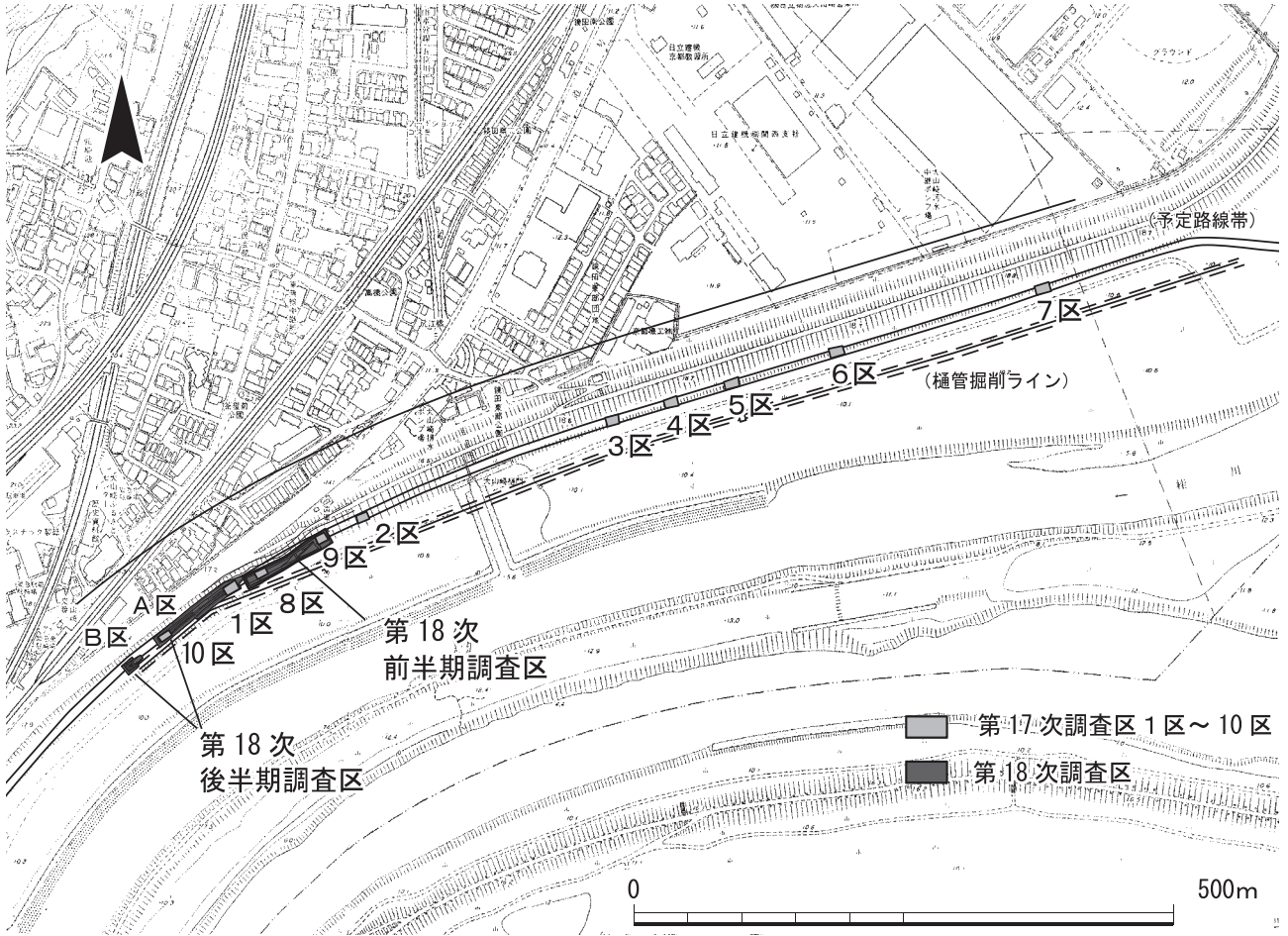
今回、桂川河川敷で 2 遺跡の調査を行った結果、山崎津跡では明確な遺構は確認できませんでしたが、中世を中心とする時期の遺物が多量に出土しました。出土する土器が、ほとんど割れていないことから河川の流れによってもたらされたのではなく、近在の居住区から廃棄されたものと推定できました。現時点では、周辺域で津跡に関する遺構は確認されていませんが、文字を印刻した瓦や山崎院などで使用されていた軒瓦が出土することから、調査地近辺に津跡に関する施設が存在する可能性がさらに高まりました。調査地周辺には、山崎院などの重要な施設が存在しており、今後の発掘調査で新発見が期待されます。

一方、木津川河床遺跡では、オランダ人土木技師デ・レイケが造った水制などを確認しました。これらの水制は、護岸を主な目的とした施設ではなく、当時の主要な運搬方法であった蒸気船による航路を常に安定した状態に保つために造作されたと考えられます。

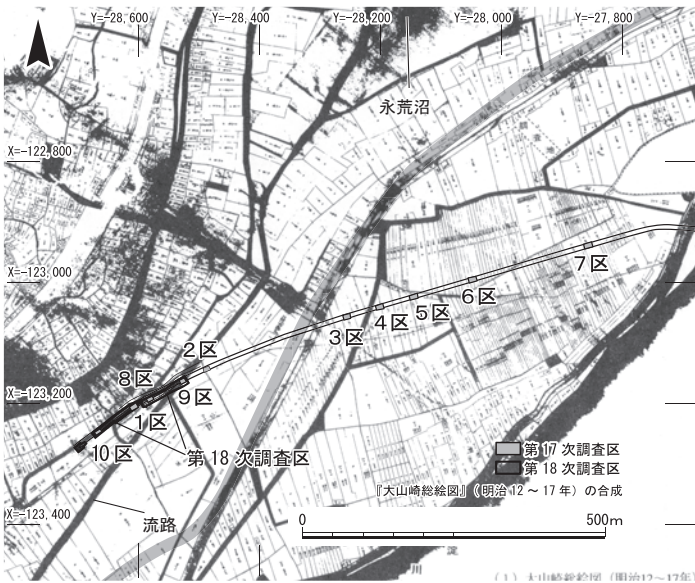
淀川流域には、部分的に水制が残っていますが、発掘調査において良好な状態で残存する水制が確認できたことは、当時の土木技術を考えていくうえでの基礎資料として重要であるばかりでなく、水運による物資輸送から陸運へと変貌するありさまを捉えるうえで、非常に重要な事例となりました。

今回の調査は、いずれも桂川堤防内で実施しました。調査地点は、現行の河道に近接していますが、河川の流水に流されることなく、多大な成果をあげることができました。今後の河川内の調査をどのように進めていくかを考える良い機会にもなりました。

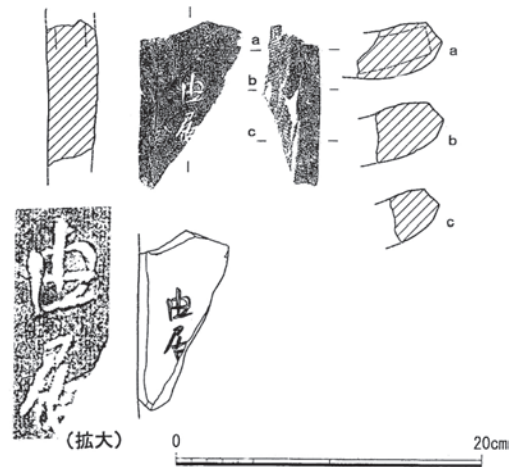




第2図 山崎津跡調査区配置図

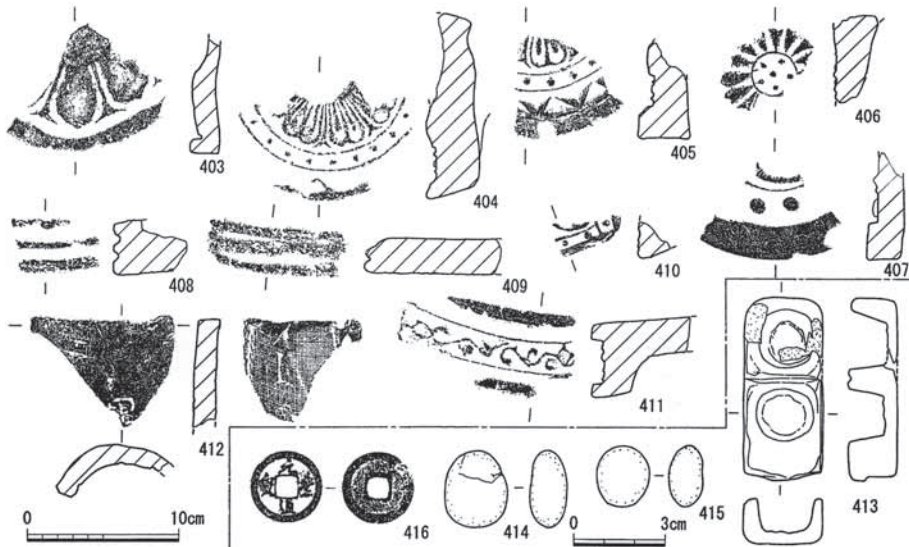


第3図 大山崎のなかの調査区

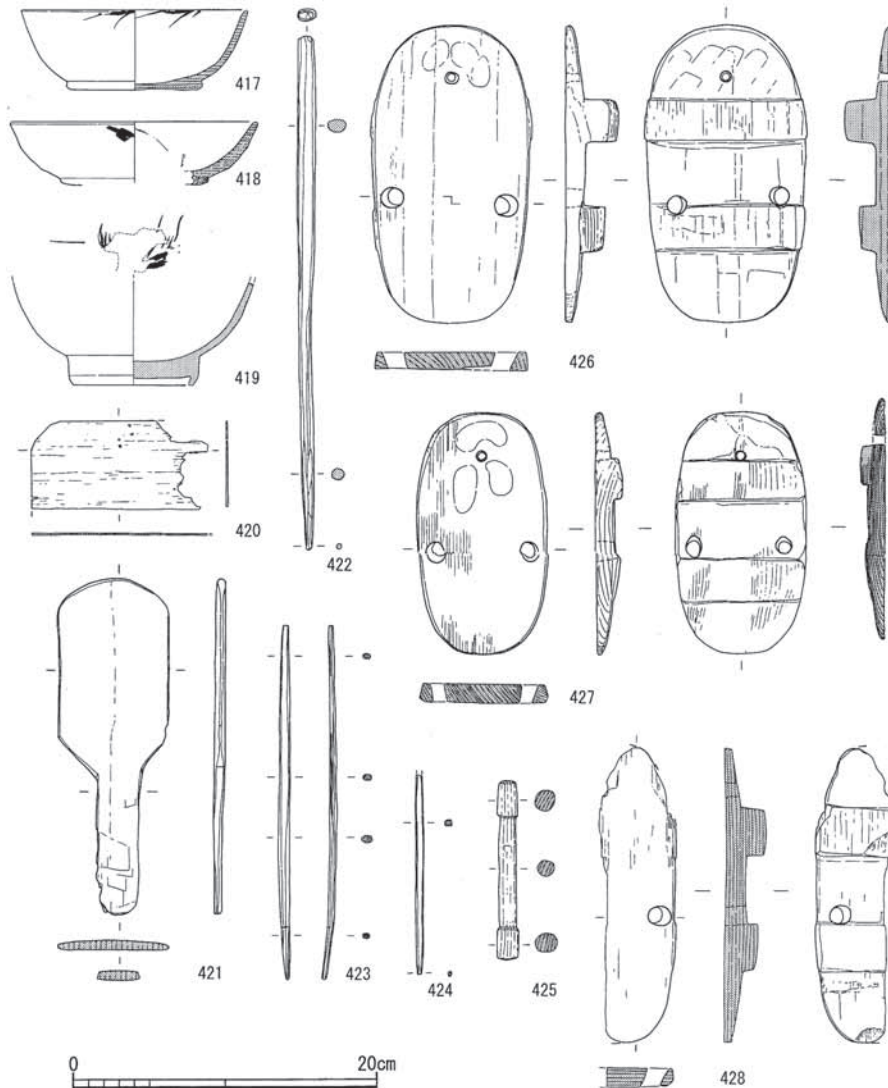


第4図 文字瓦「由居」

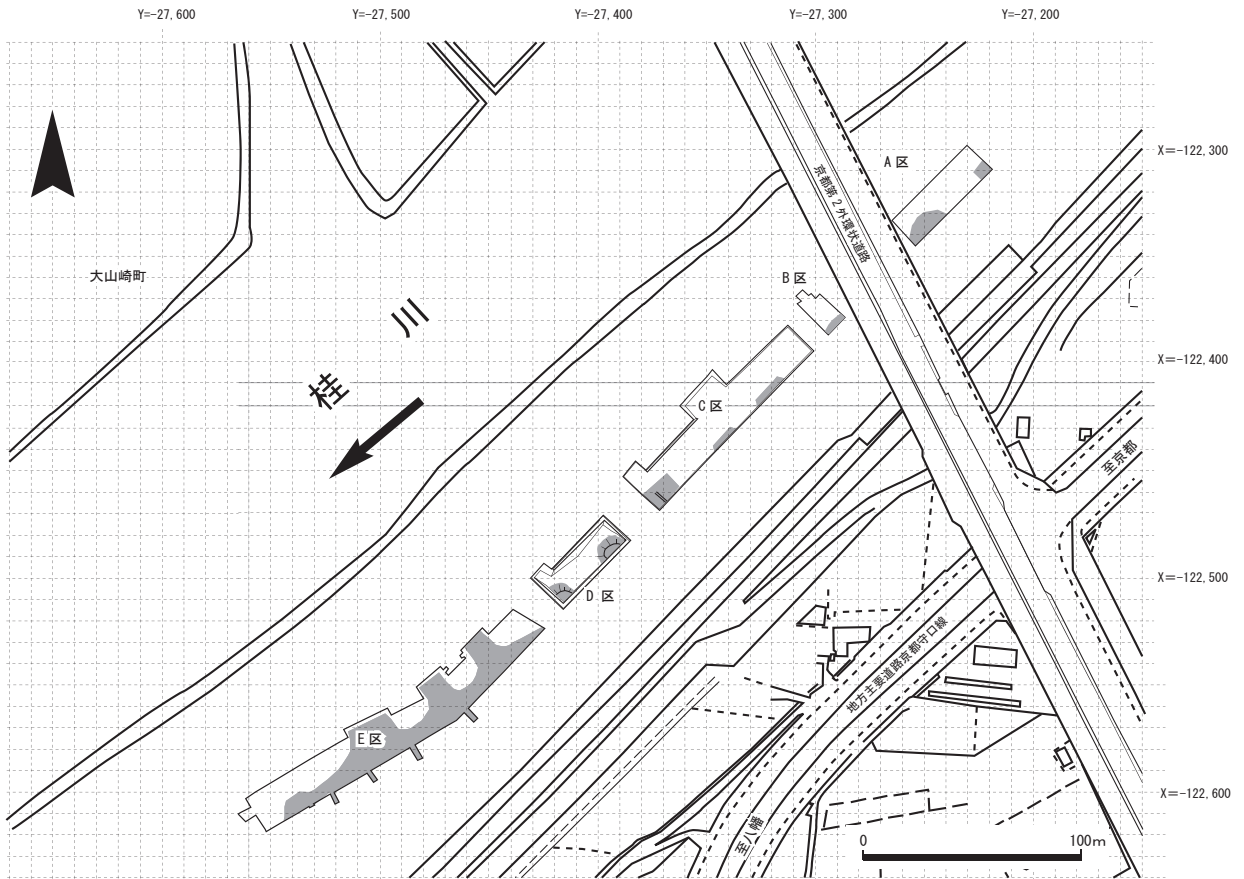




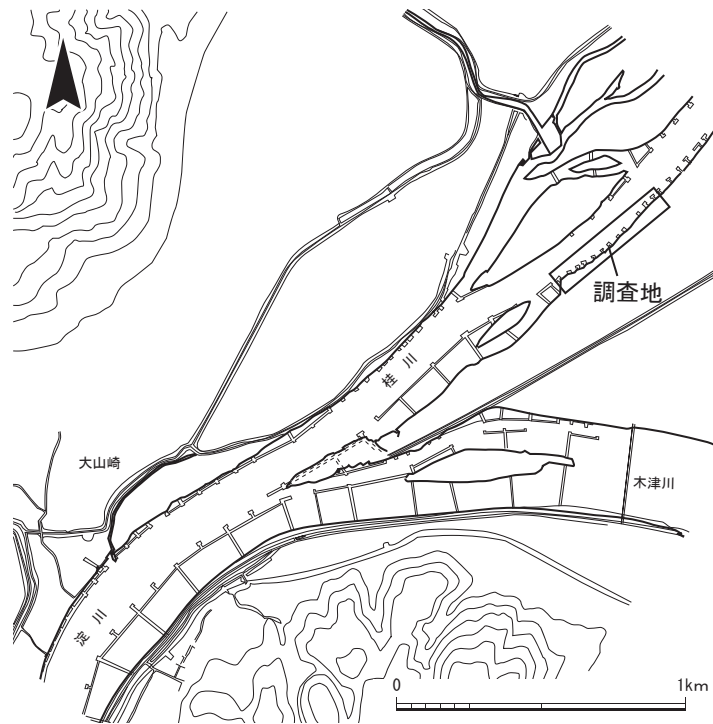
第5図 瓦・銭貨・基石・滑石製品実測図



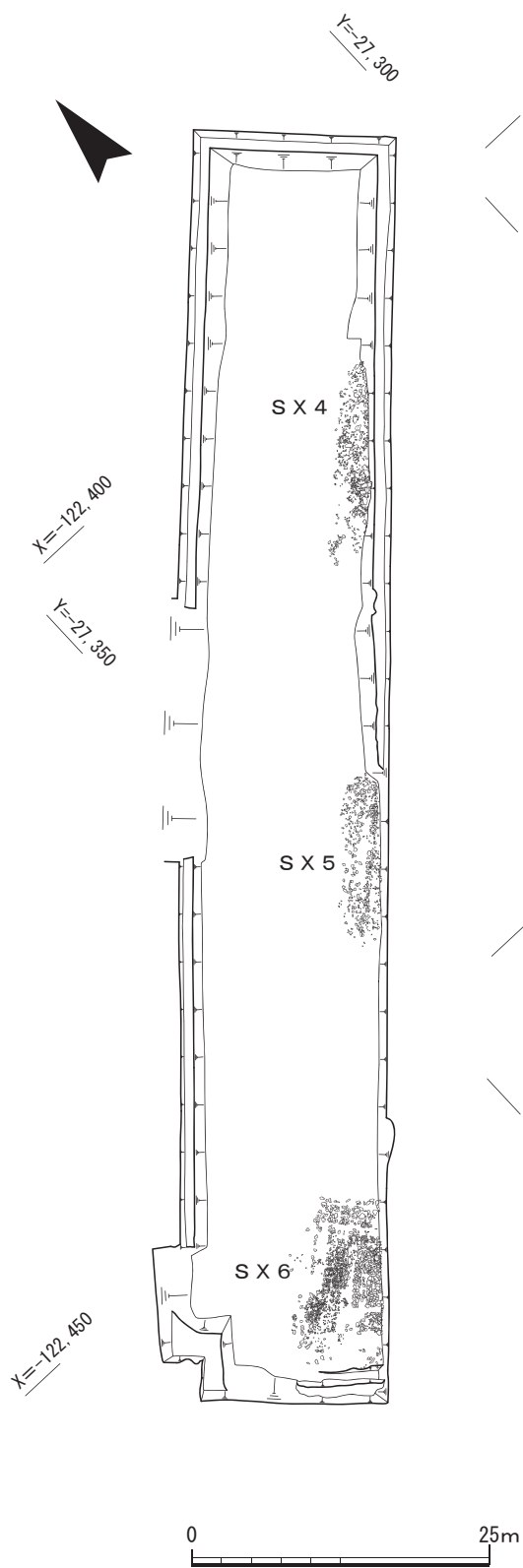
第6図 漆器碗・下駄・ヘラなどの木器実測図



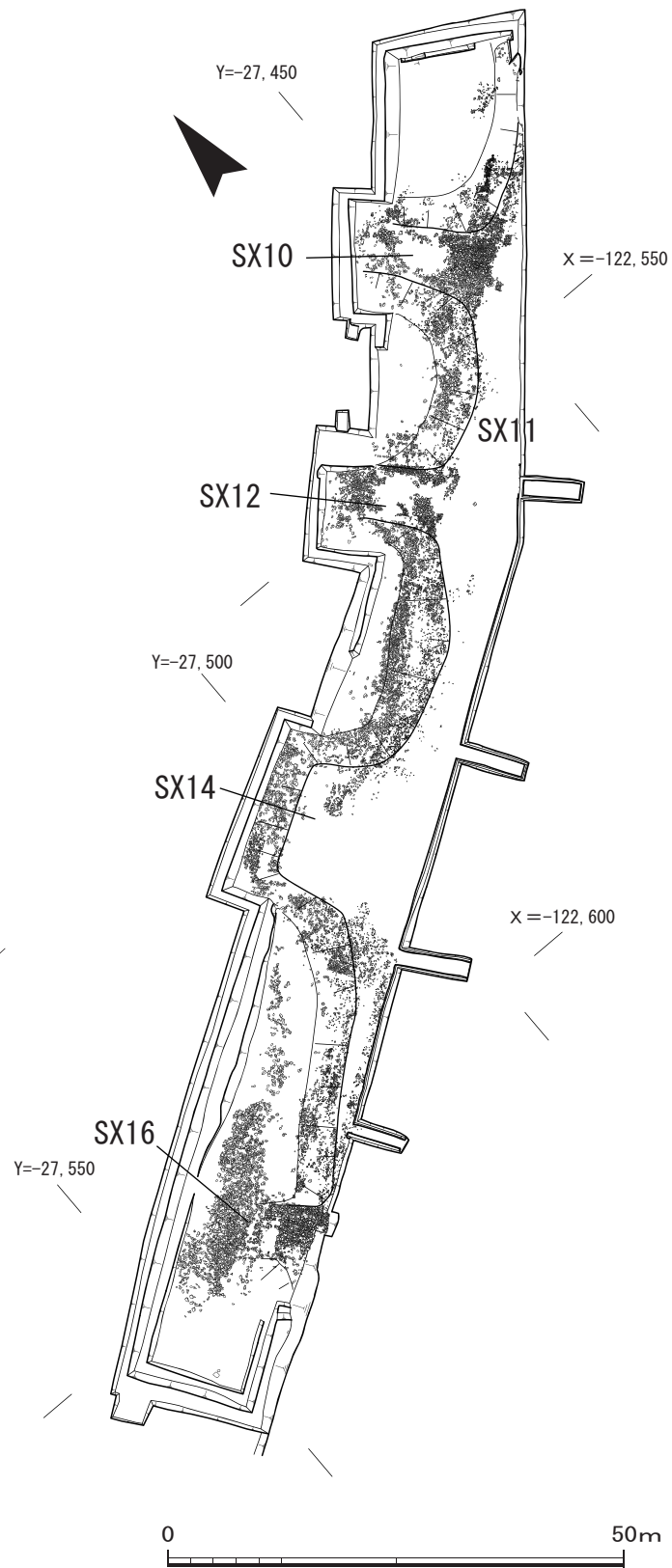
第7図 木津川河床遺跡調査区配置図



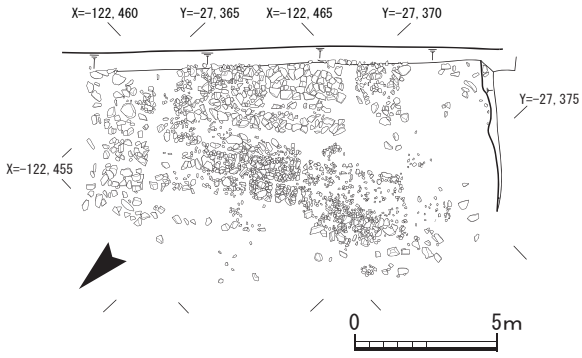
第8図 新宇治川桂川木津川合流口平面図に描かれた水制



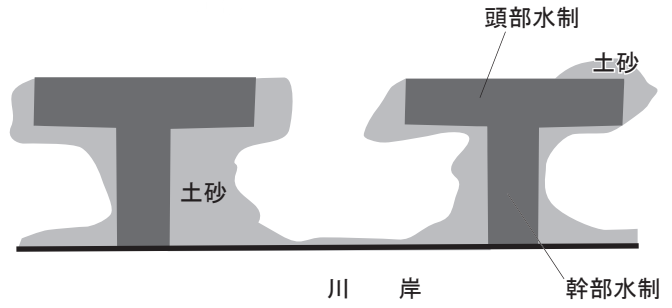
第9图 C区遺構平面図



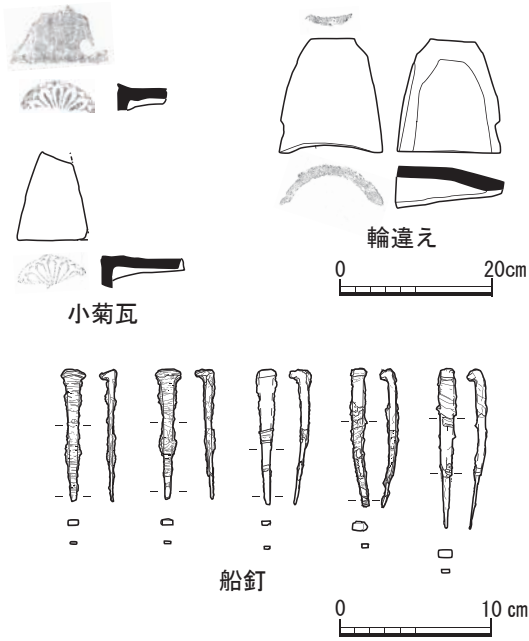
第10图 E区遺構平面図



第 11 図 C区水制S X 6 平面図



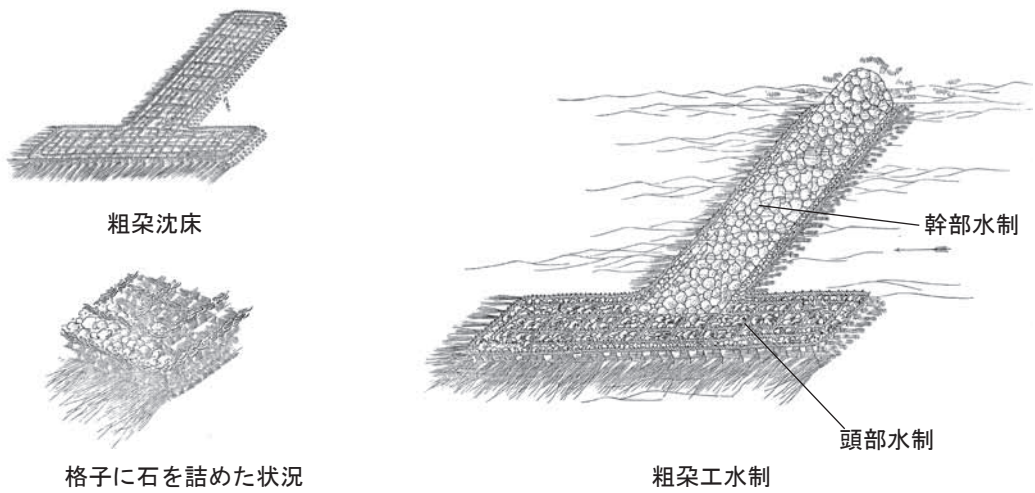
第 12 図 水制埋没状況模式図



第 13 図 出土遺物実測図



第 14 図 水制S X 14 花崗岩出土状況



第 15 図 水制絵図（土木工要録より転載）



**KYOTO  
ARCHAEOLOGY CENTER**

公益財団法人京都府埋蔵文化財調査研究センターの現地説明会や埋蔵文化財セミナー、小さな展覧会などの催し物は、下記のホームページでもご案内しています。

<http://www.kyotofu-maibun.or.jp>

公益財団法人 京都府埋蔵文化財調査研究センター

〒617-0002 向日市寺戸町南垣内40番の3

Tel (075) 933-3877 (代表) Fax (075) 922-1189